

## 国際化の時代

福田陸太郎

ああ、この国際化の時代  
とび交う情報やイメージの交錯。

今日の夕方、豪州のブリスベーンにしながら

私は十六世紀の南仏へ思いを馳せる仕儀となった。

それは「マルタン・ゲール」の帰還のためだ。

新婚後まもなく発出したアルテ<sup>(1)</sup>が村の

気まづかしい男マルタン・ゲールが

八年後ひょっこりもどって来た、愛想よくなつて。

よく働いた。フランダースの戦場に行つていたと言う。

村中それを信じた。数年後三人の浮浪者が来て、

彼を戦友たつたテ<sup>(1)</sup>ル村のアルノ<sup>(1)</sup>だと言うまで。

仲間にはマルタンもいて、彼は脚を失つたと言う。かれらは

裁判が行われ、妻は、今いる人はマルタンです、

それにもかいかありません、と証言した。

その証拠は、と聞かれ、夫婦だけの秘密まで口にした。

そのマルタンの無罪が宣告されようとした瞬間、

近づく義足の音が法廷にひびいた。

こうしてアルノ<sup>(1)</sup>は、妻と自分の息子と

皆に見守られて、絞首刑にされた。

これは本当に本當の話である。

ピレネー山脈の麓の村で十六世紀中葉にあった事実だ。

裁判官はその感懐を日記にしたためて後世に残した。

そのためにこの映画が出来た。

それを私が今夜クイーンズランド大学の劇場で見たのだ。

画面の登場人物や風景はブリ<sup>(2)</sup>ーゲルそのままだ。

コルク色、オリーブ色の衣服、

茶色かかった田園のななすまい、

人間の顔もよくよわび、純朴な農夫たちだった。

この身代りになつた良き夫は極刑を受けた。

おまそかち裁判官の白いかつらと法服は絶対の権威だ。

わが國の法廷では何を権威の象徴とするのであろうか。